

糸満市立三和中学校 (校長 金城晃)

【全学年共通実践としての平和学習】

「景色」としてではない。地域に残る沖縄戦の実相を伝えたい。

(平成27年6月、7月：現地取材)

【実践事例紹介】 中山宏美 教諭 (総合的な学習の時間担当・研究主任)

(聞き手：沖縄県平和祈念資料館 古謝将史)

1. 三和中学校における平和学習の取り組みについて

三和中学校は、学校教育計画の中での校区概況の一例として「第2次世界大戦沖縄戦終焉の地であり、激戦の跡を偲ぶ姫百合の塔、魂魄の塔(中略)、その他多くの慰霊の塔があり」と記されているほど、校区内一帯に、慰霊塔やガマなどの戦争遺跡が多く点在している。そのような背景もあり、全学年での共通実践項目として平和学習をしっかりと位置付けている。具体的には、総合的な学習の時間を活用した取り組みとなっている。総合的な学習の時間の全体テーマを「地域を愛し、豊かな生き方を求める生徒の育成」とし、平和学習については、年間計画の方針の中で「共通実践として10時間の平和学習を実施する。」と明記し、学年テーマの中にも位置づけている。

	学年テーマと具体的な平和学習の取り組み例 ～同校「平成27年度学校教育計画」より～
第1学年	「平和学習と健康・福祉(ボランティア)を学び生き方を考える。」 ～自分のため、家族のため社会のため～ ○具体的な取り組み例・・・平和講演会、ひめゆり資料館見学、レポート・新聞作成(10H)
第2学年	「生き方発見!チャレンジ活動」～平和学習・職場体験を通して～ ○具体的な取り組み例・・・地域にある慰霊の塔・碑について調べ、発表する。(10H)
第3学年	「見つけよう自分の良さ、自分の生き方を」～平和学習・高校調査を通して～ ○具体的な取り組み例・・・平和講演会、壕体験、長崎の原爆に学ぶ※修学旅行(10H)

今年度の総合的な学習の時間の担当で研究主任でもある中山宏美教諭(社会科)に、同校での平和学習の取り組みについて取材した。

(聞き手) 戦後70年の節目の年。貴校では、平和学習についてどのように取り組んでいるか?

(中山) 三和中学校では、総合的な学習の時間を活用し、全学年での共通実践として平和学習に取り組んでいる。戦後70年も経て、戦争体験者から当時の事を聞くことも少なくなっている。だからこそではないが、「平和教育は、"今でしょ!"」という気持ちがある。本校周辺には、無縁の敷地(いわゆる一家全滅跡地)や慰霊塔が点在している。まさしくこの地域が沖縄戦の激戦地であったことを示すもので

あるが、意外にも、地元の生徒たちの中にはその由来や背景についての理解不足が見受けられる。普段から見慣れた「景色」のひとつになっていないか危惧している。「景色」としてではなく、沖縄戦の実相を伝える痕跡として、しっかりと教える必要があるのではないかと感じている。

(聞き手) 各学年での取り組みの様子を教えてください。

(中山)

【3年生：平和講演会、壕体験、長崎の原爆に学ぶ】

3年生は、地域の壕で、体験者の話を聞きながら迫体験を行っている。私が同校に赴任して4年目となるが、その経験から感じていることがある。激戦地ではあるが、各家庭で沖縄戦の記憶を語り継ぐ機会がかなり少ない、場合によってはほとんどないのではと感じることもある。

今後の取り組みとしては、修学旅行の際に、長崎県で原爆について学ぶ機会がある。



【2年生：地域の慰霊塔等の調査、発表】

私が所属している2学年では、地域にある慰霊塔・碑などを調べるフィールドワークを行っている。フィールドワークについては、その実施時間の確保についていろんな意見がある。「夏休みの課題で実施したら」という考えもあるが、私としては、授業時間に組み込むことで、学習効果も高まると考えている。グループ内で各自に役割を与えながら実施することで、生徒たちの学習意欲も高まっている。本校は、校区が広いた



め自転車通学が認められているが、逆に、通学路周辺を徒歩でじっくりと観察する機会を減らす要因にもなっている。徒歩によるフィールドワークを通して、通学路や自宅周辺をじっくりと観察することで、新たな発見や気づきにつながっている。生徒たちの反応も良い。

ただ、フィールドワークをしているなかで、生徒や保護者から、「地図ではあるはずの慰霊塔(碑)が、見当たらない(見つからない)」といった指摘が寄せられている。場所によっては、全く管理がされずに荒れ放題のところもあった。ガマも、安全面から立ち入りが制限されている場所も多い。

【1年生：平和講演会、ひめゆり資料館見学、レポート・新聞作成】

1学年では、グループごとにテーマを設定して新聞づくりを行っている。(学級ごとに5班～6班)新聞づくりでは、ふたつのトピックを設定している。ひとつ目は「沖縄戦・日本が戦争を始めたわけ」を共通トピックに設定。ふたつ目は、下記の中から、ひとつを選択させている。

- 糸満市字米須にある魂魄之塔とひむかいの塔やその周辺の塔について
- ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館 ○壕の中の生活と日本軍との関係
- 沖縄県の疎開と対馬丸遭難事件 ○字真壁にあるアンガー壕と千人壕、萬華之塔等について
- 米軍最高司令官サイモン・B・バックナー中将与第32軍司令官牛島満大将について
- 平和祈念公園と平和の礎 ○沖縄県平和祈念資料館と摩文仁の丘
- 字真栄平の南北の塔→アバタガマ、字伊敷の轟壕、字伊原の沖縄陸軍病院之塔

2. 学校独自の平和学習教材の活用について

(中山) 先日、糸満市内教科別研修会(社会科 ※主催 糸満市教育委員会)で、市内6校の先生方が集まり各学校での平和学習実践事例について情報を共有する場があった。その際、糸満市史を活用している学校の事例があった。さっそく、学校にある資料を探してみたところ、本校が発行した冊子資料が40部あった。発行から年月が過ぎ、図書館にて保管されていた。今は、この冊子を参考に学習を進めている。

資料：「三和地区の慰霊塔・碑・ガマ—ここは戦場だった—」

※平成8年12月10日発行(平成13年第二刷 増補)

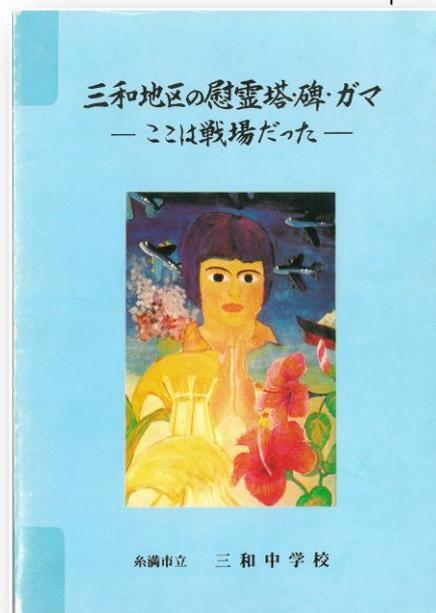
～学校独自の平和学習教材～

三和中学校(校長 新垣任紀 ※当時)では、平成7・8年度に沖縄県教育委員会・糸満市教育委員会指定「平和教育」研究校として研究・授業実践をおこなった。その過程で、三和地区の区長の協力のもと、地区内の慰霊塔・碑・ガマの調査を実施。その成果をまとめたものがこの冊子である。地区内110基の慰霊塔・碑について、参考文献をもとにした紹介にとどまらず、碑文やその位置についての学校側の考察がある。同じく地区内70余りのガマ(壕)についても、ガマでの生活状況や日本軍、米軍の状況なども簡潔にまとめられており、生徒にとっても扱いやすい内容となっている。

冊子冒頭、新垣任紀校長(発行当時)による「はしがき」の一部を紹介する。

「平和教育の難しさは、下手をすると通り一辺の結論にぶつかってしまうところにあります。反戦とか、平和とかいった結論を強調しただけでは、真の平和教育にはならないのではないのでしょうか。『心に平和の砦をどう築くか』をしっかりと考えたいと思います。」

「心に平和の砦をどう築くか」という問いは、発行から19年を経た今も続く問いとなっているように感じる。



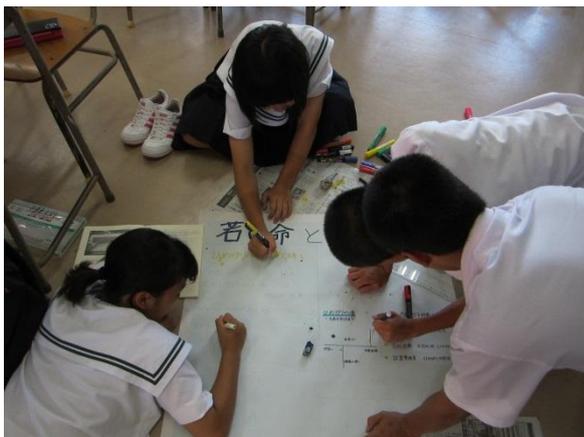
(聞き手) 学校独自で発行している平和学習教材は、大変貴重だと率直に感じる。「三和地区のガマ所在地」マップなども活用して、その管理状況なども書き込めるような学習をしてみてもどうか。戦後70年を経て、「沖縄戦の記憶の風化」の具体例として、慰霊塔の管理の問題や戦争遺跡の保存の課題についてメディアで取り上げられる機会が増えている。三和中学校では、フィールドワークを通して、生徒や保護者が直にその現状を目の当たりにしている。「沖縄戦の記憶の風化」がどのようにすすんでいくのか、校区内での現状がわかる具体的な事例として学ぶ機会となると思われる。そういう意味でも、学校独自で発行している平和学習教材の意義は大きい。その活用を通して、平和学習における成果の蓄積を図ってみてはどうだろうか。



3. 平和学習に対する教師としての思い (ウムイ)

(聞き手) 中山先生自身の平和学習に対する思い (ウムイ) は何か。

(中山) 同校に赴任する前は、平和学習 (平和教育) といっても、正直、あまり熱心とは言えなかった。私自身の学生時代を思い出してみても、平和学習をしっかりと教わったという記憶がない。実家にあった沖縄戦当時を伝えるものは、仏具くらい。ただ、記憶に残っているのは、小学生の時に教わった女性担任の存在。とくに沖縄戦について教わったということではない。給食の好き嫌いが激しかった私は、嫌いなおかずを残すことが多かった。そのたびに、かなり厳しいペナルティーを与えられた。当時は「何でそこまで？」と思っていたが、担任としては、自身が激しい沖縄戦を逃げ延びた体験を踏まえて、「食べ物に絶対に粗末にはしてはいけない」ということを伝えたかったのだということに、後になって気づく



ことがあった。今でも心から尊敬している先生で、自宅をさがして訪ね歩いたこともあった。

漠然と、平和学習を考えていたが、縁があって三和中学校に赴任することになった。ここでは、周辺に点在する慰霊塔や無縁となった敷地が校舎からでも見ることができる。沖縄戦がいかに激しかったかということが、否応なく伝わってくる。教師として、沖縄戦のことや平和について、しっかりと教えなければならぬという気持ちにさせられる学校だと感じている。

「心に平和の砦をどう築くか」を考えたい。

(以上)

「沖縄戦平和学習」今後のシェアリングのために
実践事例 No.4 【 糸満市立三和中学校 】 編

～継続性があり蓄積可能な平和学習の構築にむけて～

沖縄戦平和学習実践事例シェアリングプロジェクトも今回で4回目となります。今回は、当館の課題でもある地域連携(地域貢献)を念頭に、摩文仁の丘を校区内とする糸満市立三和中学校での取り組みを取材しました。前段として、糸満市内6中学校の社会科教諭が集う研修会に参加する機会を得たのがきっかけです。先生方によると、戦後70年の今年、社会科としてどのように平和学習に取り組むかをテーマに2ヶ月に一度の研修会で情報の共有化を図っているとのことでした。関係者によると、各学校とも平和学習に真摯に取り組んでいるそうですが、講話依頼等、担当教諭の人脈に頼っているのが実情だということでした。その為、学校独自の平和学習を継続して積み上げていくこと、担当教諭の異動に影響されない平和学習の取り組みが課題であるとも指摘がありました。

その中で、沖縄戦終焉の地である摩文仁の丘を校区とする三和中学校では、総合的な学習の時間において、全学年の共通実践項目として平和学習を明確に位置づけています。異動による影響を少なくし、継続性のある平和学習ができる仕組みとなっています。一方で、校区内の慰霊塔(碑)やガマなどの調査活動からは、平和学習における成果の積み上げなどに改善の方向性が見えてきました。

19年前に同校が発行した平和学習教材「三和地区の慰霊塔・碑・ガマ」は、同校独自の知的財産であり、平和学習教材としても価値が高いものだと感じます。その資料をベースに、毎年の調査活動でまとめた成果を継続して積み上げることで、地区内の慰霊塔などの戦争遺跡の保存活用状況の変容が明確に示される可能性があります。例えば、同資料にある「三和地区のガマ所在地」マップを活用して、単年度ごとにガマの保存活用状況を記録する。それを経年比較して、その変化を考察する。そうすることで「沖縄戦の記憶の風化」の実情がより明らかにできるのではないのでしょうか。実は、このことは、同資料のあとがきに述べられている課題意識へのひとつの回答でもあります。あとがきの一部を紹介します。

「(前略) 今後も継続的に調査を進め、沖縄戦の実相をより確かなものにしていく必要がある。特にガマ等の調査、保存活用は急を要する。そこは、多くの人々が死に絶え、多くの人々が生き延びた戦跡地の中の中核であるから……。現在は、崩落や埋没や埋め土などの憂き目に合いかねない状況である。せめて、重要なガマ等の指定を緊急にしてほしい。(後略)」

戦後70年を経て、「沖縄戦の記憶の風化」が危惧されています。ひとつの実例として、慰霊塔などの継続管理について課題が明らかになっています。三和中学校を例として、地域の特色を踏まえた平和学習を実施しその成果を継続して積み上げることで、地域の「沖縄戦の記憶」を保存・継承する手立てとなることを期待します。当館としても、情報ライブラリーの活用等を通しての平和学習支援などによる地域連携(地域貢献)ができればと考えております。

取材協力をしていただいた、三和中学校の金城晃校長先生、中山宏美先生をはじめ職員の皆様に感謝申し上げます。